

4章 保育の3つの工夫

環境の工夫（アイデアのたね）～子どもと共に～

子どもと保育者が互いのアイデアを活かして共に作り出す環境の工夫

育てていた野菜に幼虫が…（5歳児）

社会福祉法人晴朗会 すくすく保育園（大阪府）

保育者の工夫

限られた環境であっても、植物を身近で育てる経験ができるように工夫し、5歳児の保育室前のペランダを活用する。生長の変化が分かるように、また、それをみんなで共有できるように、気付きや発見をする度に写真を撮り、保育室に貼りだす。→子どもたちの思いに寄り添い、葉に付いた幼虫が飼える環境にしていく。



子どもの姿

ハツカダイコンに黄緑色の幼虫を発見した。ペランダの植物には来ないと思っていたが、いつの間にかモンシロチョウに見付かり、見事に幼虫のレストランになった。残念に思うのではないかと保育者が心配していると、子どもたちは「幼虫を飼いたい」と言ってきた。

そこで、プランターから幼虫とハツカダイコンの葉を取って、プラスチックケースに入れて飼うことにした。ハツカダイコンの葉は全てモンシロチョウの幼虫のエサとなり、幼虫はサナギへと変身した。そして、たくさんのモンシロチョウが生まれた。

「すごい！チョウチョになった！」「いっぱいや！」「これ、メスやな」「何匹おるかな？1・2・3・・・？」30匹以上のモンシロチョウを園庭で皆で見送った。

ポイント

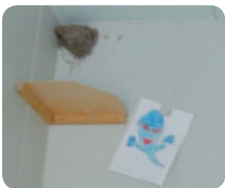
保育者は、植物を育てることを中心に考えていましたが、子どもたちの思いを受け止めて、モンシロチョウを飼うという方向に環境を再構成しています。自然との関わりでは、思い通りにいかないことに出会うことがあります。その出会いを子どもたちの遊びや生活に意味のあるものにしていくための工夫が大切です。

ツバメが幼稚園にきたよ～深くツバメを知るために～（5歳児）

富田林市立錦郡幼稚園（大阪府）

保育者の工夫

巣を作るために泥と枯草を必死に運ぶツバメを見て、ツバメが自分たちで巣を作る姿に驚く子どもたち。一人ひとりが発見したことを、クラスの友達同士で伝え合うきっかけになるように、子どものつづやきや、ツバメの巣の写真を画用紙に貼り、掲示した。



子どもの姿

写真に毎回写っている2羽のツバメに対する、「なぜ、いつも一緒にいるの？」という疑問をきっかけに、「どうやって泥を壁に貼っているの？」「どこから泥や、枯草を運んできているの？」と様々な疑問をもつようになり、ツバメをもっと知りたいと毎日観察する。

観察を続けることで、ツバメが取りやすいだろうと考え、巣から一番近い階段の手すりに枯草を置いた。ツバメの巣の中の卵を狙う敵が、蛇や猫やカラスだと分かると、家で、蛇や猫を追い払う為の絵を描いてきたり、巣の近くに貼ったりする子どもが何人もいた。

家に帰って、両親からデジタルカメラを貸してもらい、幼稚園にツバメの写真の撮りに来るC児の姿もあった。C児は何度もツバメを写真に撮るが、何度撮っても遠くてツバメが見えないと保育者に訴えにきた。ズームの方法を知らせると、「これですごく近くにツバメが見えた！」と喜んで撮影する姿が見られた。

ポイント

保育者が、子どもたちの発見を大切に取り上げ可視化したことがきっかけで、子どもたち自身から、ツバメのための環境を考え創り出す育ちに繋がりました。子どもたちのツバメへの思いは、保護者にも伝わっていることが読み取れます。また、ツバメのために分かったことから行動に移し、一つのことを探求していく経験に繋がります。（→参考、P.29）